

福祉・地域・未来をつなげる「まちぐるみのケア」

365日を、 ケアにする。

「春日台 | センター | センター」

春日台センターセンタープロジェクト概要

1970年代から、団塊世代やそのJr.世代にとってこの地域の中心(センター)だったスーパーマーケット[春日台センター]閉店を機に、その場所を使って福祉を中心としたコミュニティ拠点としてもう一度再生するプロジェクト。

事業構成

- | | |
|-------------------------|------------------|
| 1. 認知症グループホーム(高齢介護) | 定員 18名(9名×2ユニット) |
| 2. 小規模多機能型居宅介護(高齢介護) | 定員 29名 |
| 3. 障害者就労継続支援A・B型(障害支援) | 定員 20名 |
| 4. 放課後等デイサービス(障害児支援) | 定員 10名 |
| 5. コインランドリー&洗濯代行(洗濯&飲食) | |
| 6. コロッケスタンド(惣菜/コーヒー) | |
| 7. 寺子屋(教育支援) | |
| 8. コモンズルーム(地域開放スペース) | |

目的

コロナ禍を経験した今こそ、多様な人びとが集まる場を創出し、住民参加型のケアの拠点が必要。福祉施設を地域にひらき、地域課題を織り合わせながら福祉事業を実践することで、要介護高齢者・認知症・障がいのある人といった福祉サービス利用者や、何らかの生きづらさを抱える人(不登校・生活困窮者など)、外国につながる子どもたちを含む多世代の人々が、地域の中で共に暮らし、働き、活動するプラットフォームを創出する。こうした、この施設に関わる様々な人を包摂し、地域社会との分断を生まない拠点づくりにより、「再犯防止」や「孤独や孤立」なども支援できる環境を目指す。さらに、これらの「共にある」環境を構築し、同様の課題を抱える地方都市へのロールモデルとなることを目指します。



事業開始前のリサーチと活動「地域の現状と課題の抽出」 2017年～

※他の地域における汎用性において重要なプロセス

当該地区の背景

核家族化や少子高齢化や社会構造の変化により、他者との関わりが減少し街のなかで子どもや障がい者、高齢者と触れ合う機会がない。かつて1970年～80年代に栄えた当該地区「春日台」の中心にあった商店街と春日台センター（スーパーマーケット）の閉店によりさらにこの地域は衰退していた。

地域課題の抽出を「手段」とする

住民主体の寄り合い『あいかわ暮らしラボ』を創設。

※あいかわ暮らしラボとは、年齢・性別・職種によらず、地域の困りごとや地域資源を発見し、まちの暮らしを考える住民主体の寄り合い（ワークショップ）である。2017年3月 第一回開催。関連イベントも多数開催した。

参加者の属性

農業従事者・造園屋・デザイナー・建築家・システムエンジニア・教員・元教員・地元高校校長・介護福祉士・ケアマネ・社会福祉士・障害者施設管理者・看護師・弁護士・臨床心理士・大学教授・子育てママ・北極冒険家・町職員・町議会議員・花屋・精肉店店主・酒蔵蔵元・会社員・消防士・自治会・民生委員・保護司・県議会議員・小学生・中学生・高校生・大学生　ほか

2017年～2021年　開催　計40回以上　延べ1200人以上

多世代、多職種、地域住民との協働により、現状の課題を抽出できたことが、春日台センターセンター事業化への大きな礎となった。

- [地域の課題（主なもの）]
- ・外国にルーツのある子どもの不登校

・ひとり暮らし高齢者の孤立、空き家問題

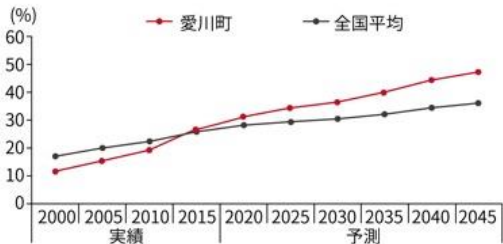
・子どもの居場所がない

・多世代で交わることがない

・お茶できる場所がない

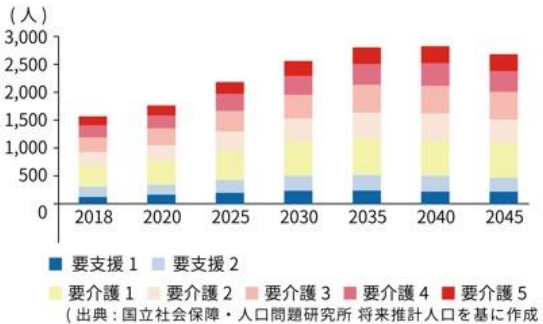
・医療的ケア児の通う場所がない

愛川町の高齢化率の推移



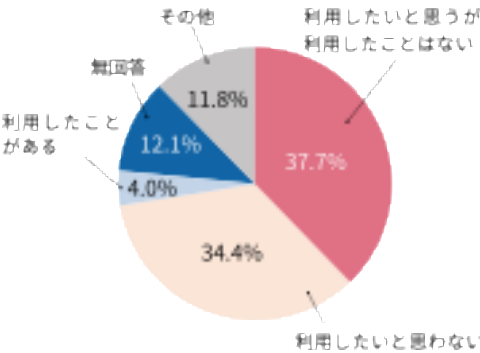
※高齢化率・人口に占める 65 歳以上の人口割合 (%)
(出典：国立社会保障・人口問題研究所 将来推計人口を基に作成)

愛川町の見守り要介護者の推移



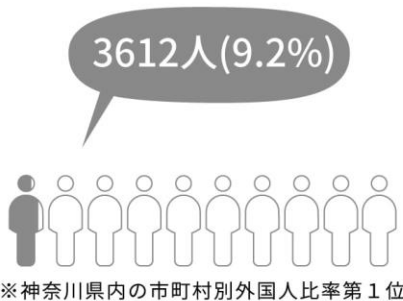
要支援 1 要支援 2 要介護 1 要介護 2 要介護 3
(出典：国立社会保障・人口問題研究所 将来推計人口を基に作成)

愛川町民のボランティアへの利用経験



出典：第3次愛川町地域福祉計画・地域福祉活動計画

愛川町の外国人人口



(出典：愛川町 HP, 愛川町の人口と世帯 (R6.12))

住民参加型ワークショップ（2017年～）



小さな多世代交流フェス（2017年）



竹林整備ワークショップ（2018年）



まちの生活動線上に位置する。 「福祉施設」の新たな役割。

敷地境界に塀などを設けず、だれでも入れる空間、開かれた場を提供し、さらには参加したくなる空間を仕掛け、交流を促進する。

認知症や障害のある人たちの自由な行動を保障する。障害や異なりに偶発的に出会う場に。

駄菓子屋、学習スペース、遊びの空間、畳の空間、飲食、洗濯など生活に密着した活動・行動により人々が自然に「共にある」場面を創出する。

職員が「リスクとハザード」、「安心と信頼」の軸で整理し受け入れ



「環境」からアプローチする「越境するケア」とコミュニケーション

[ひらかれた福祉施設の環境支援]

・大きな軒、縁側。かつての日本家屋の持つ建築の力を採用する

小上がりを地域に開放、土間を施設全体に通し駄菓子屋やみんなのトイレなどを配置している。広場に面してコロッキスタンドやコインランドリーを配置することで、福祉に直接関わることのない人たちも日々立ち寄る環境設定にしている。福祉利用者と地域の人々が空間をシェアし合う中間領域、共有空間を創出している。

・ガラス張りにすることで人とのつながりを担保する。

建物内が外から見えることで、中での様子や温度感が伝わりやすい、逆に建物内からも外の様子が見え、地域とのつながりが感じられる。窓際がコミュニケーションを誘発する。

・不完全さを活かしてケアの機会を創出する

あえて完全なバリアフリー化をしない環境にすることで、気にかけてケアし合える環境を作る。例えば、車椅子の障がい者が手動で引き戸を開けようとして時間がかかっているときに子どもたちがその姿を見て手助けをする場面が生まれる。

・玄関がない施設。勝手口と土間空間でアクセシビリティを向上

勝手口のように気軽に入れる空間へのチャレンジ。8箇所の入り口と土間で各サービスを横断できる空間整備。アクセシビリティの向上には「靴を脱がないこと」が重要な要素である。地域の誰もが“ちょっと立ち寄れる”場所にするには、人の思いだけではなく、空間のあり方が「コミュニケーション誘発装置」となる。



春日台センターセンター特有の主な取り組み

認知症グループホームと障害児通所支援事業を同じ建屋で展開。障がい児と認知症高齢者が同じ空間で自由に行き来をする環境設定をして世代間交流と相互作用を促進。

洗濯代行事業 & コロッケスタンドは障害者の就労支援でありながら、忙しい人の家事労働の負担軽減など暮らしをケアする役割を担い、障害のある人が支える側に立ち、人々が関わり合う場所になっている。

寺子屋では、地域の活動団体との協働により外国籍の子どもたちや不登校の子どもたちへの学習支援を行っている。

協働活動団体：寺子屋くすくすの木

1970年代につくられた広場を含む公共空間が、現代の課題解決の糸口となっている。施設前の広場では、地域と福祉の交流を生み、交差点のようになっている。



死をタブーにしない。
この地域の中心の開かれた場所で、旅立ちを見送る。

看取り介護、そして見送り



成果と影響

年間3000人以上の人たちが高齢者や障害者と共に地域イベントに参加。解説から3年間で全国からの視察者1万人以上を受け入れ、ナレッジの共有をしている。

影響

開かれた福祉を展開することにより、日常的に人のつながりや活気が生まれことによりシャッター商店街のシャッターが開き、新たな店がオープンし賑わいをみせている。

地域の人や自治会との協働により祭りやマルシェを開催するなど福祉と地域活性化を両立している。

近隣の学校と連携し、未来の福祉人材（中高生）への出前講座や大学のゼミとの研究などを多数実施している。

Additional Info: 神奈川建築コンクール優秀賞や2023グッドデザイン賞金賞、2023日本建築学会賞などにより、福祉分野以外の領域、異業種からの興味関心を引き寄せている点。



センター前広場での自治会との合同地域イベントなど





● 論点 1 | 「日常」の再定義と包摂の視点

- ・孤独・孤立対策は、特別な福祉的手段だけではなく、日常生活の延長にある環境・仕掛けによっても可能である。
「共にある」状況をどう自然に生み出すか？その鍵は環境設計 × 日常の交差点化にある。
→ 提言：「ひらかれた日常空間」への政策的投資が、孤立の予防になる。

● 論点 2 | 福祉と地域のあいだの“中間領域”の必要性

- ・ケアする人／される人という構造を越えて、地域に偶発的なつながりが生まれる中間領域（例：ランドリー、コロッケ、駄菓子、学習支援、一定時間誰かと居られる場所など）の空間設計が重要と考えた。
→ 提言：“非福祉領域”と“福祉”を横断するプロジェクトへの横串的な支援の仕組みが必要。

● 論点 3 | 「場の力」と「他者性」による予防的ケア

- ・看取りや認知症など“重たいテーマ”を「日常の風景」として受け止められる地域文化の創出は、政策としても取り入れるべき視点。
→ 提言：まちぐるみの“予防的ケア”や“日常的ケア”を生む場づくりへの支援メニューの具体化



春日台センターセンター

LAUNDRY
CULTURE
LABORATORY
DOWN JACKET
DOWN BLANKET
TWEAKS

365日、特別じゃない毎日が
「孤立・孤独」を、急がず、騒がず、
あたたかく包み込んでいく。
一人ひとりが、誰かの“いる場所”になる。
その連なりが、ケアのある社会をかたちづくる。